

Title	3 2 : 東京歯科大学水道橋病院総合歯科における平成 2 6 年度外来初診患者の動向
Author(s)	山本, 真志; 山下, 秀一郎; 齋藤, 淳; 佐藤, 亨
Journal	歯科学報, 114(5): 517-517
URL	http://hdl.handle.net/10130/3478
Right	

No.31：東京歯科大学千葉病院歯科麻酔科外来症例の臨床統計（2013年1月～12月）

平田淳司¹⁾，澤口夏林¹⁾，若杉由美子¹⁾，遠藤真唯²⁾，岡田玲奈³⁾，征矢 学⁴⁾，神戸宏明⁵⁾，井出智子¹⁾，佐塚祥一郎¹⁾，塩崎恵子¹⁾，松木由起子¹⁾，松浦信幸¹⁾，笠原正貴⁶⁾，一戸達也¹⁾
 (東歯大・歯麻)¹⁾ (北斗病院・歯科口腔外科)²⁾ (東歯大・市病・麻酔科)³⁾
 (東京大学附属病院・麻酔科)⁴⁾ (千葉市立青葉病院・麻酔科)⁵⁾ (東歯大・薬理)⁶⁾

目的：2013年1月～12月に千葉病院歯科麻酔科が歯科麻酔科外来にて担当した症例について集計し，検討したので報告する。

方法：患者数，症例数，男女比，年齢分布，患者分類，処置内容および管理方法についてレトロスペクティブに集計した。加えて，2013年1月～12月の院外から千葉病院歯科麻酔科への紹介件数，その紹介目的と患者管理法について集計を行い比較検討した。本研究は，東京歯科大学倫理委員会の承認を得て実施した（承認番号559）。

成績および考察：総患者数は2,476名，総症例数8,052症例で，男性1,082名，女性1,394名，0～19歳253名，20～39歳847名，40～59歳647名，60～79歳633名，80歳以上96名であった。患者分類はペインクリニック272名2,285例，有病者648名1,475例，障害者408名1,506例，歯科恐怖症患者（異常絞扼反射，過換気症候群なども含む）419名1,698例，口腔外科小手術患者305名462例，インプラント患者133名276例，救急患者23名23例であった。有病者の内訳は循環器疾患866例，呼吸器疾患98例，代謝内分泌疾患109例，薬物アレルギー24例，その他378例で

あった。歯科処置中の患者管理を行った症例は3,832例で精神鎮静法が3,183例と最も多く，このうち3,158例が静脈内鎮静法であった。吸入鎮静法は25例，モニター監視は206例，歯科麻酔科医スタンバイは291例であった。2013年度の静脈内鎮静法の使用薬剤の内訳はミダゾラム単独で441症例，プロポフォール単独で401症例，両薬物の併用症例2,273症例，その他43症例であった。

3年間の当科外来の紹介件数は392件で男性152名，女性240名であった。最低年齢は3歳，最高年齢は93歳であった。内訳はペインクリニック患者161例，歯科恐怖症患者76例，障害者113例，有病者42例であった。ペインクリニック患者では投薬96例，星状神経節ブロック31例，その他34例であった。管理法では，歯科恐怖症患者は76例に対して全て静脈内鎮静法を行った。障害者患者では静脈内鎮静法77例，診査25例，その他11例であった。有病者患者では静脈内鎮静法19例，モニタリング12例，その他11例であった。当科への紹介件数は増加傾向であり，院外における当科専門外来の認知度が上昇しているものと考えられた。

No.32：東京歯科大学水道橋病院総合歯科における平成26年度外来初診患者の動向

山本真志¹⁾，山下秀一郎¹⁾，齋藤 淳²⁾，佐藤 亨³⁾ (東歯大・口健・総歯)¹⁾ (東歯大・歯周)²⁾
 (東歯大・クラウンブリッジ補綴)³⁾

目的：東京歯科大学水道橋病院は平成25年のメインキャンパス移転に伴い，新たな体制となって2年目を迎えている。近年歯科に訪れる患者の疾患は多様化しており，診療科ごとにその特徴に合わせた患者対応が必要とされている。そこで患者動向を調査し，今後の患者対応の一助とすることを目的として本調査を行った。

方法：平成26年6月から平成26年10月までの期間に水道橋病院2階の総合歯科，保存科，補綴科合同の予診に登録された初診患者を対象とし，患者数，紹介状の有無，年齢及び性別，来科地域，疾患内容，紹介先診療科などについて調査した。

結果：平成26年6月から平成26年10月までに来院した初診患者は1,049人，男性410人（39%），女性639人（61%）であった。そのうち紹介状持参患者は210人で，初診患者の20%であった。紹介患者の年齢別内訳は，40歳代が29%で最も多く，50歳代が16%，30歳代が21%と続き，60歳以上20%，20歳以下14%であった。紹介患者の来科地域別内訳は，東京都23区内が61%と最も多く，次いで千葉県と埼玉県が共

に12%，東京都23区外が8%，その他が7%であった。紹介患者の疾患別内訳は，根尖性歯周炎が60%と特に多く，次いで補綴関連，齲蝕，辺縁性歯周炎が共に9%，歯髄炎が5%，その他が8%であった。紹介先診療科は，総合歯科が42%，保存科（歯内）が43%，保存科（歯周）が6%，補綴科が9%であった。

考察：今回の調査結果では，紹介患者のうち30～50歳代が紹介患者の67%を占める結果となった。これは首都圏内で労働する人の多さ，首都圏に位置する当院の利便性の良さが関連していると考えられる。また来科地域としては23区以外に県外から来院される患者も多く，県外における当院の認知度の高さもうかがえる。疾患別および紹介先診療科については，歯内療法関係を中心とした偏りが見られたことから，各診療科の特徴を外部に発信する必要性も感じられた。今後は，院内各科の連携はもとより，地域の医療機関との連携をより密なものとし，よりよい患者対応に努める必要があると考える。